

今年の夏休み、松永記念館で「井上三綱展」が開催されると聞き いまから楽しみにしている。小田原市には美術館がないが、年に1度くらいは美術館級の展覧会を見たいと思う。今後できたらいいなと思う、小田原ゆかりの作家の企画を挙げてみたい。

「本多希枝展」

1994年に具象絵画の登竜門とされる安井賞を受賞している。独立美術協会会員であり、武蔵野美術大学映像科講師を勤める。現在は川崎在住であるが、小田原出身であり、当時の居宅は松永記念館の現在は駐車場になっている場所にあったそうである。松永記念館での開催となれば、作家も感慨を覚えることであろう。

「近藤弘明展」

東京都出身の日本画家であるが、宗教的な主題の幻想的な絵で評価が高く、1971年第1回山種美術館賞展優秀賞を受賞している。1994年平塚市美術館で展覧会が開催される。古くより小田原市板橋にアトリエを構え、近年は東京の居宅も引き払い、板橋にて制作をつづける。これほど長く小田原の地にご縁をいただいているのであるから、なんとか実現してほしいものである。

「三沢厚彦展」

現代彫刻の世界で今、最も注目を集める作家のひとりだ。特に近年は動物をモチーフにした木彫作品を精力的に発表し、弱冠40歳で第20回平櫛田中賞を受賞するなどその実力が高く評価されている。2007年平塚美術館で開催された時には、親子連れが多く来館するなど、美術愛好家はもとより幅広いファンに支持を広げている。楠の丸太から削り出される実物大の動物たちは、小田原のアトリエから生み出されます。

小田原にご縁をいただいている作家との交流を深め、展覧会が実現できたらどんなに楽しいことかと思っている。



「正岡子規と美術」展

横須賀美術館

OMP 野口誠之



正岡子規と聞いてどんなことを思い浮かべられますか。

明治期に、近代俳句、短歌の革新をめざした文学者としてよく知られており、司馬遼太郎の国民的小説「坂の上の雲」では、同郷の軍人秋山好古、真之兄弟や文豪夏目漱石らとの交友関係が生き生きと描かれています。NHKで3部にわたってドラマ化され、先ごろ完結したことも記憶に新しいところだと思います。

文学者としての子規は、実は美術にも深い関心があり、「僕に絵が画けるなら俳句なんかやめてしまふ。」という一文もあるくらいです。東京・根岸の子規庵で開催される句会、歌会につどった人々を介して、西洋美術と対抗しようとする日本の洋画の在り方を模索していた同時代の画家達とも、子規は盛んに交流していたのです。その子規とその周辺の画家達の作品を一堂に集めて、「坂の上の雲」の時代を振り返ろうという「正岡子規と美術」展が、4月15日まで横須賀市の横須賀美術館で開催されています。

家庭向け新聞「小日本」の編集者であった子規が、彼を採用した陸羯南の紹介で知り合った浅井忠、その挿絵を依頼した中村不折、子規庵での歌会に当初から参加していた香取秀真らの作品の他、フランスから帰国して、当時の美術界に旋風を起こしていた黒田清輝、さらには西洋画教育の原点であるフォンタネージや彼に師事した五姓田義松の作品まで展覧し、著名な作品こそありませんが、西洋文明を貪欲に吸収しながらも、近代日本美術を確立しようとした画家たちの熱い思いが感じられると思います。

当の子規の作品は、病床にあった彼が身辺を「写生」した「床の間写生図」や漱石に送った「あづま菊」など、小品ながら彼の実直さがにじみ出ているような水彩画を中心に展示されています。

展覧会場である横須賀美術館は、東京湾を望む絶好なロケーションに立地し、景観を重視して常設展示のスペースは地下に設けています。ガラスを主体とした白亜の建物は、その前面に広がる芝生のスロープと一体となって、美術館を訪れる人々に入館前の期待感と高揚感を与えてくれます。常設展も充実していますし、別館には週刊新潮の表紙絵で有名な谷内六郎の原画が展示してあり、彼の解説文と一緒に楽しめるようになっています。また、今回の「正岡子規と美術」展にあわせて、無料の「坂の上の雲」パネル展も開催されており、じっくりと時代の空気を楽しむことができますので、ぜひお出かけになられてはいかがでしょうか。

3月のこと
長谷川瀧二郎展の残務処理も済み、3月29日小田原市に事業報告をした。予想外に生まれた今回の収益金については、実行委員会として共催した小田原市とも相談の上、今後の西湘地域の芸術環境づくりに活用していくことで、ご協賛者や市民へ還元していきたいと考えている。また、今回の記念図録の残部は、小田原の子供たちの教育活動と被災地への支援に生かしていただきたいとの思いで、贈呈させて頂くことにした。図録は2000部のうち950部の残部が出たが、小田原市内の小学校25校の各学級文庫に1冊ずつ、中学校11校に各2部で合計437部を寄贈させていただいた。また、相馬のNPO法人相馬はらがま朝市クラブに100部をお送りし、「届いたときはお声をいただいた。その後はらがまクラブから、学校関係に30部、仮設住宅・集会所15か所に各2部を配布し、40部を朝市と報徳庵にて100円で販売された」とのご報告をいただいている。残りは共催者の小田原市とOMPで200部ずつ持ち、今後の活動用に使おうとしていく。今回の事業を振り返ると、官民協働の事業の可能性を感じる。小田原市を中心とする西湘地域には、井上三綱画伯をはじめ郷土の文化にとって大切な作家がいるが、作品の収集・保全・研究が体系的になされていないとは言い難い。重要な作家の作品リストのデータ整理等できるところから着手する必要がある。また小田原ゆかりの作家の良質な展覧会の開催も市民から望まれているところである。こうした地道な活動を、今後とも官民協働で実現していくこともOMPの望むところである。

市民ホール基本計画(案)・小田原市文化振興ビジョン(案)が示された。市民ホールは大ホール1200席、小ホール300席固定席、ギャラリー350㎡、大スタジオリハーサルや展示などに利用できる室とし、中スタジオリハーサル、ワークショップルーム、創造スタッフ室等を備える。交流の場として、オープンロビー、レストラン・カフェ、託児室も計画されている。専門委員・市民検討委員を交えて一年間検討したもので、よくまとまっていると思う。文化振興ビジョンは、序章「なぜ、今、文化振興が必要か」第一章「私たちが考える文化振興」第二章「課題と取り組み」第三章「推新進体制の整備に向けて」の組み立て、美術関係で付則していただきたいことがある。実践していく事業例として「国内外で評価される作家の美術展」小田原、西湘ゆかりの作家・作品の調査研究と収集「美術品収蔵庫の整備拡充」を入れていただきたい。また第三章で、「ビジョンの推進には、文化振興施策を把握し、実施される文化事業全体のバランスや文化団体間の連携支援等を継続して検討する組織を立ち上げる必要があります」と提言されている。これにはぜひ実現をしていただきたいと思う。